

# 立正平和の核運動

室 住 一 妙

(一) 立正平和運動といえどもニューズ性はかなりうすらいでいる。とはいえ、考えてみれば、之は宗学内の体系宗学の生命であり、実践宗学の綱領である。即ち日蓮宗の日本社会に生きているかどうかの浮標である。世界史における日蓮教の真価なのである。全く葬式仏教中の多様式の随一の何かと関係があるかどうかは今且く別とする。日蓮聖人というものが、たとい、すでに今は、生きた人としての伝統をどこにもうかがい得ないにしても、その事蹟に文書に筆蹟にすら、ほのかにその在りし日の面影を想望されるとするならば、その範囲内で、立正平和運動は歴史を貫いていると思はれる。ましてや、その教学的源泉に一掬できた人にとっては、七百年の変転さかまく運命に、ふまされたり、根こぎにされたり、焼き払はれたりし乍らも、どこかに、かすかに見出すであろう。いや、極言せば、無相の相において、生きつゞき、はたらきつゞいて、不増不減に、核運動は止まないものだと思ふ。いや、私は信ずる。

本誌前号に述べたのは、その一端を私なりの拙さで描いたもので、まだ核心にふれぬ、具体的運動でもなかった。たしかに、ある読者が、運動としては、むしろ、これによってこれから期待すると、評してくれたというより、わざとほめてくれた。そのおことばに對してすら、つゞいて述べねばなるまいし、勿論運動せねばなるまい。

(二) 前号に發表後、今秋の日蓮教学研究發表を期して、題を「立正平和」の核、とした。そしてその覚え書き風のも

のを、「日蓮宗布教研修所だより」に掲げた。之に本いて、意のあるところを解説して、会衆にきいていたゞいた。そこでこゝでは、そのプリントを再録し、やゝ委細に論旨をすゝめていきたいと思う。

(三) プリント 「立正平和」の核

今や、平和運動は、三十六億の心胸を揺がす事実である。……但し、それに応ずべき、我らの誠実さは、はたして如何？

こゝに、所謂「立正平和運動」のそれとは且く別とする。今は溯って、根源の、「立正平和」について考えたい。之は、今更いふまでもなく立正安国論の、

汝早ク信仰ノ寸心ヲ改メテ、速カニ実乗ノ一善ニ皈セヨ。然ラバ則チ三界ハ皆、仏國ナリ。仏國ソレ衰ヘンヤ。十方ハ悉ク宝土ナリ。宝土何ゾ壞レンヤ。國ニ衰微ナク、土ニ破壊ナクンバ、身ハ是レ安全、心ハ是レ禪定ナラシム。コノ詞、コノ言、信ズベク、崇ムベシ。の御文に本づく。

この「実乗ノ一善」こそ、立正平和の唯一の種であり、核であると信ずる。(今この種核の十如是を左の如く挙げて解説を試よう。)

(一) 我々は、全人類、永遠の主・師・親を、釈迦牟尼仏であると信仰する。

(二) その釈尊の真実、正嫡の御弟子が、日蓮聖人であることを、実証的に信認する。

(三) 全世界及大宇宙的絶対平和は、たしかに、釈尊より日蓮聖人へと流れて来た血脉に、理念として、誓願として躍っている。いな、歴史的事業となっている。

(四) 宗祖大聖人の御二代(満六十年)は、正しく、之が人間の国家的世界史的实现運動であった。少くとも、一万

二千年の中でも、中樞的関節である。

(四) 而も宗祖滅後、今日こそ、その神聖な運動を復活すべく、先づその種核を究明せねばならぬ時である。

(六) 宗祖のお示しによれば、種とは妙法五字七字とする。即ち、「如来トハ十方三世ノ諸仏、二仏三仏、本仏迹仏ノ通号ナリ」という如来、「十方仏土中唯一乘法無二亦無三」の妙法蓮華経の如来の、寿量品の、肝心の、五字七字である。

(七) その作用の、「如来一切自在神力」とは、△法界は皆寂光土▽を目覚めて拝する。即ち、無上の尊さを拝し得る目を開かすことである。その開目の良薬を種という。種の機能性・内在の世界機構を核という。

根本尊崇（構造的中心）

本来尊重（展開体系）

本有尊形（現実存在）

の三は、種の一点に集約し、

金宇宙に拡大していくのを首題とい、不思議な大光輪囿の唯一の目を題目とい、この微妙の様相を、妙法曼荼羅、輪囿具足と称される。

(八) かゝる種核、「如来一切秘要之藏」を行持して、大宇宙に実現する大事業を「如来一切甚深之事」とされる。

(九) 甚深之事の行持、実践的事は、「今身ヨリ仏身ニ至ルマデ能ク持チ奉ル南無妙法蓮華経」に外ならぬ。但し須要な点は、この能の一字につき、善く良く慎重な吟味を要する。完器の譬、我慢偏執の誠、十四誹謗等。

(十) 已下は、もはや、当然必然の流れで、個々の色心・三業は、家庭に社会に教団に国家に世界等にと及んで、仁者無敵の王者、四天下を自在に神通遊戯する金輪大王の如く、大摂受・大折伏して進軍する。……はては、地

上のあらゆる主権・国境・民族・伝統・宗教等々、各々その処を得、百花その根性を発輝し、永遠の(常)絶対  
平和の(寂)円融文化(光)の世界が、この地球上に(土)現はれる、そういう常寂光土である。

尊い哉。

④ 仮りに掲げた十条の中、(一)については、仏教徒の世界には全く、異議のあるべくもないと思はれる。がしかし、その純粹さと徹底さに於いては、唯だ法花経の行者日蓮聖人を以てその最とすることも、恐らくは日本及び、世界の仏教徒に於いて黙然信受する事であろうが、未だその事実も理由も知らないのが大多数なのである。事実、(一)の内容は平凡々といえる位の正常さ。それを後世、とやかく過不及した誤や偏執から釈尊以外の仏をあがめる、全く異端そのものの宗教が今日なほその本流のような勢力を維持してをるのである。

この条項には、教主釈尊の三徳と永遠性とをうち出してあるが、実に三徳を仏陀たるの精神的本質と考えたときこそ、已下九ヶ条の天運を啓開する母胎たることが、背かれ得よう。

(二)においては、全一仏教の教学的結論と云はねばならぬ。合理的に理性的に教学的に。宗派的立場から、そう在りたいと希望する信念ではなくして、苟くも、仏教が、真実の仏教であり、全部まとまった唯一の仏教とみなすかぎり、その上に立つ法華経教学、而も仏教々学史的流れ、そして日蓮聖人御一代の事蹟から、実証される。それをたゞ、我々は真面目に認め、素直に信ずる。

(三)については、法華経の精命をどうつかむか、設えば、「全一仏教—法華経」という大塊を、思想とか哲学とかいう光線で照らし出して、いはゞ、記小・久成とか、教法論の統一と仏身論の統一としてつかむことがある。または仏性論・一念三千論で、つめてもみられよう。それらは記号化され、術語化され、思想系のうちに組織されていく。それ

が、精神文化財として、何らかの用途に操作され得よう。それはそれなりに必要でもあり、結好のことだが、しかし実は、そうした思想的文化財を産み出した生命が重要なのである。なほ別に、その思想的意味表現の、意味の意味、究竟的な目的、意志というものこそ一層重要なのではないか。之を、私はそこに、「理念」として、誓願として」と添えておいた。釈尊が、仏陀として、この現実世界に、大地に立たせたまうた事実と、そのお意志をうかがはうとする。それではなくては日蓮聖人の御心持も、しっかりとつかめないのではないか。「全世界乃至大宇宙の絶対平和への祈りと歩み」こそが、廣大深遠の仏教哲学にも、雄大微妙の日蓮聖人の生命にも事業にも、重要な関係がなくてはならぬとする所以ではなからうか。

実に、△釈尊と法華経と日蓮▽の三者のつながりこそが、立正平和の基盤なのである。

四の年数の比をいうのではない。(一〇〇〇対五)(〇、五パーセント)の五なるものが全く、光前照後の中枢性を指摘し、大事業運営に関する主要責任者という意味である。(一)の永遠・三徳、本門三宝といふ、唱導師といふ、予言実証といふ、今更とかくこゝに弁すべくもない。この運動の在り方こそ、斯の人のみに委嘱されている。神力品の偈文に

於如来滅後 知仏所説経 因縁及次第 随義如実説 如日月光明  
能除諸幽冥 斯人行世間 能滅衆生闇 教無量菩薩 畢竟住一乘

と、まことにあざやかに、教主釈尊より、絶大信頼を以て、全権を委し、讚歎祈念を尽くして呪したまう。

因たしかに世界的・世界的という文字通りに、現代の今日の只今こそ、大危機の一点に立つ。或はなお以上かも知れない。人類史よりは、地球史生物史にまで及ぶ危機である。之をよく、すくい得るもの、たゞこの神聖な運動のみ

に在ると信ずる。四において、宗祖当面のことは立正安國を実証なされ、救護なされたのであるが、今日の世界平和は、我々の分々の責任に於いて、充分尽くさねばならぬ。そこで、いかに具体的運動を起すべきかとなる。「今日こそその神聖な運動を復活すべく、」云々と書いたわけである。だが、実はこゝにこそ重要な問題がひそんでいる。後に述べよう。

四 この一条は、本宗、日蓮門下全部に於いて全く異存はなからうと信ずる。しかし、「如来トハ」と、天台の釈を借りたのは本門寿量品の釈のところであり、また仏教一般の仏の通称（十号の一）だと、をさえるためである。十方仏土の経文は、宇宙的空間における唯一仏乗を証するために、唯一仏乗の妙法蓮華経の如来寿量とは、常住不滅の御生命である。その肝心というは正に臟腑に当る五字七字である。

「夫生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華経是也。其故は釈迦多宝二仏、宝塔の中にして、上行菩薩に譲り給ふ。此妙法蓮華経の五字は、過去遠々劫より已来、寸時も離れざる血脈なり（中略）然れば久遠実成の釈尊と、皆成仏道の法華経と我等衆生との三、全く差別無しと解て、妙法蓮華経と唱へ奉る處を、生死一大事の血脈とは云ふ也。此事但、日蓮弟子檀那等の肝要也。」（五二二）

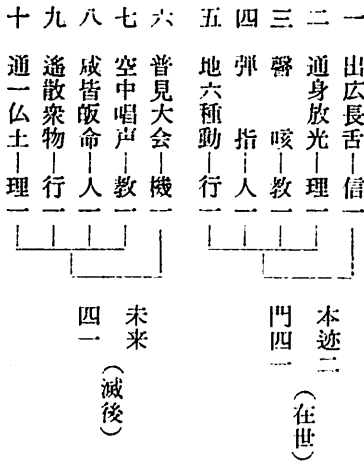
（五）は、この種の作用は、「今本時の娑婆世界」の現象即実在であらう。（一二七三）——「退転なく修行して、最後臨終の時を待って御覽せよ。妙覚の山に走り登って、四方をさきと見るならば、あら、面白や、法界は皆、寂光土にして、瑠璃を以て地とし、金の繩を以て、八道を界へり、天より四種の花ふり、虚空に音楽聞えて、諸仏菩薩は常樂我淨の風にそよめき、娛樂快樂し給ふぞや。我等も其の數に列りて、遊戯し樂むべき事、はや近づけり。信心弱くしては、かゝる目出度き所に行くべからず、く。」

もちろん、臨終の時をまたずと、死を超えたら、いつでも拜せるであろう。「一心欲見仏 不自惜身命 時我及衆僧 俱出靈鷲山 我此土安穩 天人常充滿」云々冥目してみるのでなく、心眼を開いてみる。めざめて拜する。

その目の良薬の専売権、「日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。」とそれを今、この法について、良薬に内在せる世界を見ようとするのである。如来寿命品の文義は、たしかにこゝに掲げた、本尊三義に善く恰当しているのではなからうか。

久遠無始の本因本果はこれ構造中心の尊厳さ、爾來の大化は展開体系の尊貴な実証である。そしてこの世界の万有がそのまゝ、この本仏の依正・能所の化用である。これが、是好良薬に調劑され、結晶された五字である。

四この広大な秘密の開展を、本化別付に先立って、十大神力として示された。之について天台の釈を借りてみる。



法花仏教の在滅にわたる勝妙な構造と展開を整然と見せられているが、未来四一の本化別付・末法の初の後五広付を

明示し予表して、現実には常寂土を指してをることに驚かされるではないか。(中はたゞ、之に本いて述べただけである。)  
凡右の大業を正式に御付囑なされた宣言を結要四句とする。そこにも、天台の五玄の釈に対して、本宗の三秘をあて  
、みよう。

如来一切所有之法	名	一大秘法
如来一切自在神力	用	成坦
如来一切秘要之藏	体	本尊
如来一切甚深之事	宗	題目
皆於此経宣示顕説	教	一部八卷
		本門

凡右の三大秘法単的の受持を的示する。こゝに、能持の能の吟味こそ、宗祖の御一代身を以て示された大事である。  
それを、こゝで今、立正平和の核運動という。

一言で、我慢偏執をなくして持つこと、「されば若暫持者我則歡喜諸仏亦然と説き給ふは此の心也。されば三世の諸  
仏も妙法蓮華経の五字を以て仏に成り給し也。三世の諸仏の出世の本懐、一切衆生皆成仏道の妙法と云は是也。是等  
の趣を能々心得て、仏に成る道には、我慢偏執の心なく、南無妙法蓮華経と唱へ奉るべき者也」と、法華初心成仏抄  
に結ばれている。(一四三三)

法華経の行者(能持是経者)は題目の行者、そののみが立正平和の核運動者である。この優勝な法器を規定づけられ  
て、秋元御書(一七三一)には、

「此の覆漏汚雑の四の失を離れて候器をば完器と申して、またき器也。ほり・つゝみ、漏らざれば、水失する事なし。

信心のこゝろ全ければ、平等大慧の智水、乾くことなし。」たしかに平等大慧の智水こそ、照らしも潤しもする。立



正平和の力である。

次に十四誹謗の問題は、信行の反極として重要である。ごくかりそめの盲点から、飛んだ災禍も招くように、かゝる聖者の訓誡を常に身につけていかねばならぬ。このころは、さほど謗法を重視もされず、厳しく云はれないようだが、それだけに却て危険である。この出処は譬喩品の偈文で、天台の釈出にまつ。

一、橋慢、二、懈怠、三、計我、四、淺識、五、着欲、六、不解、七、不信、八、毀謗、九、罣墮、十、疑惑、十一、輕善、十二、嫉善、十三、憎善、十四、恨善。

このうち、一・二・五は個人的態度に、三・四・六・七は教義についての相貌、八・九・十は深まった謗りである。

十一・四は、法華經の持者への態度である。身口意三業に、道俗にわたって、本宗々徒の自誠とすべきことを「此十四誹謗は在家出家に亘るべし。可恐々々。」(一二六六)と仰せられている。

以上で、プリントの解説を大体終へたとして、なほ、(四)の項の復、活の語について次に考えてみる。

そもくこの神聖な運動は六七百年中死滅しているのだろうか。仮りそめにも、死滅したとみなされるような運動なのか。それをまた我々の力で活かし得るのか。法を軽んじやしないだろうか。自我に慢じやしないだろうか。法、聖なればこそ、事、重大なればこそ、に深く考えねばならぬのである。若しも、「身ハ輕ウシテ法ヲ重ウセヨ」との厳誠に違してはならぬ。事功を讃しても却って法の心を殺しては、それこそ世界平和は、泡沫のごとく、シンキロウのごとくに消えていく、と同時に、自身は、まつさかさまに墜落し、無間地獄の底に到って留まるであらう。

実にこの神聖な運動は、我々が生滅殺活を沙汰し、操作すべき事ではなかったのである。(一)~(四)にと展開し来った跡は、是れ不生の生・不滅の滅の、不可思議の隠顕なのである。

既に如是相性乃至本末究竟の等に至っては凡下の我らの口舌に弄すべくもない処、まして復活など及びもつかぬことである。たゞ、その冥々の参加を許されるように祈るべく、精進すべきである。この態度こそ深重な意味があることを気づかされた。

まもなく、日教研大会に出席、山中喜八先生の、「若有諦聴」というお説をきいていよ／＼この信念の正しいことを証明されたように覚えた。それは山中先生の恩師、片岡随喜先生の逸話として御宝前によりみあげる回向文を永年修補を加えつゝ、卅有余稿に及ぶ。中に「若有」と「諦聴」の経文の字を借りて、之を動経の態度とされたという。殊に若有は方便品の「若有聞是法皆已成仏道」（若し是の法を聞くこと有りし者は、皆已に仏道を成じき）、同じく「若有聞法者無一不成仏」、（若し法を聞くこと有らん者、一として成仏せざる者なし。）という文、この若有を、特別な訓でよみ、自ら誠められたという。その訓みは、「イマシメサスゴトク」（現にそこにおいてになるごとく）という意味である。まことに若有を（もし）することあらば」というだけならば、必ずしも、成仏は保証できぬ。成仏に必当する若有とは、正に、そこに儼然と釈迦仏のおいでましまし、金口の梵音声を聞き奉る思いをなすべきで、「諦聴々々」とくれ／＼も仰せ遊ばしてをる。こゝに目ざめること、之を立正というのではないか。立正平和運動とは、先づ「若有・諦聴」より始まるべきではなからうか。

前号の結論にも「この光によって世界人類が自づと平和への道を各自に発見できる、そういう光である。」また「現下における、立正平和運動は、本質的には、たった一人でも仏知見を開示悟入するという一件である。」―その一件の解決こそ、若有・諦聴であろう。ほんとうに素直な真面目さに徹すればよいのであろう。

普賢品第廿八には、釈尊は普賢菩薩をよびかけられて仰せになつてゐる。

「若有受持誦誦正憶念修習書寫是法華經者

当知是人則見釈迦牟尼仏、如從仏口聞此經典

当知是人供養釈迦牟尼仏

当知是人仏讚善哉

当知是人為釈迦牟尼仏手摩其頭

当知是人為釈迦牟尼仏衣之所覆」云々とつゞくが、五返の当知是人には、絶対的に平和が保証されている。今此三界皆是我有、其中衆生、悉是吾子、乃至唯我一人能為救護の釈迦仏が、御手を以てなでたまう、衣をもっておほいたまうという。そうきいたなら、絶対に畏れないでもよいではないか。だが若有諦聽でなくば信じられない。不僧ではお自我偶は何のためによむのか。それでは本尊抄の「今本時娑婆世界」はどこへ往ってしまったのだろうか。それは十神力の特に後の五神力の空中唱声の声もきかず、咸皆皈命もせずしては、どうして通一仏土が現前するのか。宗門人は、本気になって、法華經の文字をよんでいるのだろうか。一々文々は真仏とまでは、行かなくとも、ごくすなほなきもちで、拝読したらば、立正平和の核運動は、はちきれるほど沸き立っているのが感じられるのではなからうか。狂うてしまうては、全く、近しといえども見えないのだ。だがしかし、

結経には、厳かに宣言されている。

「時ニ空中ノ声、即チ是ノ語ヲ説カン。

釈迦牟尼仏ヲ毘盧遮那・遍一切処ト名ツク。

其ノ仏ノ住処ヲ常寂光土ト名ツク。

常波羅蜜ノ拱成セラルル処

我波羅蜜ノ安立セラルル処

浄波羅蜜ノ有相ヲ滅セル処

樂波羅蜜ノ身心ノ相ニ住セザル処

有無ノ諸法ノ相ヲ見ザル処

如寂ナリ解脱ナリ、乃至般若波羅蜜ナリ。」とある。

こうして、私は信ずる、立正平和の核運動の十如是は、先づ一念信解・一念隨喜を本門立行の初めとなし、そして本結大縁寂光為土を以て本末究竟等とされようと。